

ローカル線における無人駅の活用に関する研究

建築計画研究室（鈴木ゼミ） 17-1-191-0320 伊藤はるな

1. はじめに

日本の総人口の減少により、地方を走る鉄道路線のローカル線は乗降客数が減少し、鉄道会社社員の駅員が常駐しない無人駅が増加している。

駅の新たな評価指標として乗降客数だけでなく、駅舎と地域の関係、駅舎ならではの使われ方等を調査することを目的とする。

2. 研究方法

NPO や一般社団法人、個人事業者が従来とは違った駅舎活用を行うJR西日本京終駅、近江鉄道日野駅、南阿蘇鉄道長陽駅、南阿蘇鉄道南阿蘇水の生まれる里白水高原駅（以下、白水高原駅とする）の4駅を調査する。

各駅舎において、現在に至るまでの経緯を年表に整理、駅舎の利用方法、地域に与える影響、運営者の年齢層、きっかけ、想い、駅舎であることを活かしていた利用方法を駅舎ごとに比較する。さらに、駅で行われたイベントについても調査する。

3. 京終駅（JR西日本桜井（万葉まほろば）線）

JR西日本所有の駅舎がコンパクト駅舎になることを知った奈良市は駅舎を譲渡後、奈良市主催の京終駅周辺まちづくり協議会にて京終駅の活用方法が住人と話し合わせ、その協議会に参加した40代男性の有志3人によってNPO KYOBATEが設立され、奈良市から京終駅の運営を委託されている。駅をまちづくりの拠点として、人脈を生かし様々なジャンルの人と

協力しながら、ターゲット層を絞ったイベントを開催している。地域の為でなく、自分や子どものためにしていることが結果的にまちのためになる。また元自治会長の70代の男性が日本初のコミュニティ駅長にJR西日本から任命され、ボランティアで観光案内、駅舎の清掃等を行う。誰もがわかる地域のシンボルである駅が変わることでその地域が新しくなったように感じてもらえることができる。

4. 日野駅（近江鉄道近江本線）

近江鉄道所有の築約100年の駅が駅舎の老朽化によりコンパクト駅舎になるという話を聞いた日野町は住民の意見を聞く目的で日野駅利用促進活性化懇話会を発足し、住民の強い希望により近江鉄道所有のまま日野町が改修工事を行った。その懇話会にて、駅舎の観光案内・交流施設「なないろ」にカフェ機能を備えることと日替わりで店主が出店することが決まり、その案を提案した60代男性のメンバーを中心に一般社団法人こうけん舎が設立され、日野町からなないろの運営を委託されている。なないろでは将来店を出したい人の実験の場や自己実現の場としてカフェ等が日替わりで出店する（表2）。なないろが初めての出店という人が半数を占め、儲けではなく、人が好き、地域の人と交流を持ちたいと考えている日替わり店主が非常に多く、日替わり店主の年齢層もお客さんも異なるため、様々な年齢層になないろを知ってもら

表1 各駅の活用状況の比較

	京終駅	日野駅	長陽駅	白水高原駅
住所	奈良県 奈良市	滋賀県 日野町	熊本県 南阿蘇村	熊本県 南阿蘇村
利用方法	カフェ・物産品販売 火水曜日以外	日替わり店主方式 毎日	資本ケーキ屋 土日のみ	古本屋 金土曜日
駅舎所有者	奈良市	近江鉄道	南阿蘇村	南阿蘇村
運営形態	市から運営委託	村から運営委託	借用	借用
運営開始	2018年冬	2017年10月	2006年2月	2015年8月
運営	NPO KYOBATE	(一社)こうけん舎	店主：30代男性	店主：30代夫婦
観光案内	コミュニティ 駅長	平日：観光協会職員 休日：ボランティア	店主	店主（金土のみ）
鉄道会社駅員	×	朝夕のみ	×	×
出身	○（地元）	○（地元）	×（佐賀県）	△（旦那のみ地元）
本業	酒屋など	自転車屋など	資本ケーキ宅配	たこ焼き屋店員
運行	1,2本/時	1本/時	×	×
駅機能	○	○	×	×

ことができる。また観光案内所には観光協会や観光ボランティア協会の職員が観光案内を行うスタッフとして常駐している。駅の待合室であるなないろに日替わり店主が出店することで、まちの玄関口である駅ににぎわいが生まれ、この場所を目的としていない多くの人と関わるができる。

5. 長陽駅（南阿蘇鉄道）

南阿蘇村が所有する築約100年の駅舎を借用、佐賀県出身の40代前半の男性が休日に資本ケーキを提供する「久永屋」を運営している（被災により現在電車の運行はない）。駅舎に置いてあるもののほとんどは訪れた方からの寄贈であり、様々なものが所狭しと並んでいる。地元の高齢者や通学で使う子供はもちろんこの駅を使っていた子供が大人になってからも訪れ、地元の人のたまり場になっている。また地元だけでなく遠方からも何回も足を運ぶ人も多い。観光案内所の機能を持ち、観光客の行き先と観光客の架け橋になっている。

6. 白水高原駅（南阿蘇鉄道）

南阿蘇村が所有する平成5年に建てられた駅舎を借用、夫が南阿蘇村出身の30代後半の夫婦が古本屋「ひなた文庫」を運営している（被災により現在電車の運行はない）。本棚を動かすことで空間を自由自在に変えられ、店主が選りすぐった古本を南阿蘇の景色を見ながら読むことができる。この場所に来ることが店主の日常を送るために必要なサイクル、習慣になっており、この場所で本に囲まれ、お客さんと話すことを楽しみにしている。日本一長い駅名を目的に来た観光客や古本屋を目的にしている人に立ち寄ってもらう

ことができ、様々な人と関わるができる。

7. まとめ

無人駅の活用や運営に至る経緯は様々であり、自治体が鉄道会社から相談された場合は住民の意見を聞くため会議を主催し、その会議から駅舎を運営する団体が誕生している。また南阿蘇鉄道の2駅は駅舎と風景に惚れ込んだ個人事業者が役場に直接駅舎の活用を提案している。運営者は年齢層も様々で、本業を別に持ち、地元の人に限らない。さらに4駅とも駅舎活用の決定等に鉄道会社がほとんど関わっていない。

駅は車利用者にも認知されており、その地域の玄関口、誰もがわかるシンボルであり、その場所がにぎやかになることで地域ににぎわいが生まれる。また昔から日常生活の一部としてまちの人や電車を利用して来た全員の歴史であり、関わっている人や記憶に残っている人の量がとても多い。これらの特徴を生かし、新しい地域の拠点になる可能性を秘めているといえる。



写真1 京終駅



写真2 日野駅



写真3 長陽駅



写真4 白水高原駅

表2 日野駅なないろ 日替わり店主比較

団体名	1	2	3	4	5	6	7	8
利用用途	ランチ カフェ	ランチ カフェ	カフェ	アーティスト による演奏会	カフェ	飛び入り 参加型演奏会	カフェ イベント	占い +カフェ
日替わり 店主	70代 女性	70代 女性	日野高校2-3年生 (任期1年)	60代 男女3人組	50代 女性 専業主婦	50代 女性 元観光協会臨時職員	50代 男性 占い師	
団体 個人	個人	個人	団体 (日野高校)	団体 (ユニット)	個人	団体 (演奏仲間)	個人 (いとこ)	個人
出店	毎週火水曜日	毎月第14木曜日 第3土曜日	月1回 金土日曜日	月2、3回 18:30~22:30	月3回月曜日	第1日曜日	月3、4回 金、日曜日	最低月2回 仕事がない日
お客さん	地域の方 観光客	地域の方 発達障害の教え子	高校生、地域の方 子ども連れ家族	地域の方 音楽関係	地域の方 高齢者	地元の方 演奏したい方	地域の 70代以降の方	地域の女性

表3 関係者の駅への関わり

	京終駅	日野駅	長陽駅	白水高原駅
地域の方	○	◎	◎	△
主体者	◎	◎	◎	◎
自治体/役場	○	○	×	×
鉄道会社	×	×	×	×